幸福の赤いサクランボ

中国への尽きない興味

今年のさくらんぼの販売出荷は予定通り8月20日に終了し、30日までには入出金の整理などもおおかた済ますことが出来た。本年度の収穫・出荷は量、金額ともに目標を数%超える結果になった。

私は今年1月ごろから、今年のさくらんぼの生産量や販売額が目標通りになるようなら、シーズン終了後、4年ぶりに一人で中国の東北地方（旧満州）への旅をしてみようと計画していた。

私が初めて中国を訪れたのは2004年の夏。山形でさくらんぼ栽培と販売にかかわる友人2人と一緒に、大連周辺のさくらんぼ栽培地を視察旅行したのが最初だった。それ以来、2010年まで毎年、夏冬合わせて9回訪れた。

06年と07年の夏には、2年前に亡くなった母と共にハルビン、チチハル、満洲里、ハイラル、牡丹江などを回った。母は昭和3（1928）年に生まれ、「女学校生時代は満州に憧れていた」と時々話していた。

08年、北京五輪があった夏には山東省煙台のさくらんぼ農家数軒を訪問し、現地栽培の可能性を探ったりもした。

しかし、11年の震災後は事業の拡大などで仕事が忙しくなったため、中国旅行を控えていた。

今回の訪問では目的を3点に絞った。第1は、中国東北地方へのさくらんぼ輸出や現地栽培の可能性を調べること。次に中国最東端にある街「撫遠」と、黒竜江と松花江が合流する街「同江」の訪問。第3に戦前、日本から旧満州にわたった人々による開拓部落跡地と、方正県にある日本人公墓を訪れることだった。何よりも中国という国に対する尽きない興味が旅行への思いを駆り立てた。

ハルビンから同行してくださる通訳の方と何度かやり取りして旅行の日程を決定。9月1日から10日間、中国黒竜江省東北部を回った。今回の旅行の様子は次回のコラムでお伝えしたい。

中国最東端の街、撫遠の門の前に立つ多田耕太郎さん。市街地の先に流れる黒竜江の対岸はロシア＝9月7日

多田耕太郎　1954年山辺町生まれ。金山町のスリッパ工場長を経て、41歳で就農。2009年に法人化し、2・1㌶のサクランボ園を経営する。